

琵琶湖沿岸、西の湖および伊庭内湖におけるホンモロコの産卵状況

大植伸之

1. 目的

ホンモロコの産卵状況と産卵期間中の水位変動の影響を把握するために琵琶湖沿岸(2地点)と周辺内湖(2地点)において産卵調査を例年行っており、令和2年度についても同様に調査を行った。

2. 方法

琵琶湖沿岸(大津市小野、長浜市湖北町延勝寺)と周辺内湖(西の湖、伊庭内湖)の計4カ所において、湖岸距離約50~100mのヨシ・ヤナギ帯で、3月中旬から7月中旬まで原則1回/週の頻度でホンモロコの産卵状況を調査した。孵化までの期間常に水中にあった卵を生存卵、孵化までの期間常に干出していた卵を死亡卵、孵化までの期間干出した期間が含まれる卵を不明卵と評価した。B.S.L.(琵琶湖水位)の変動は、琵琶湖河川事務所の琵琶湖水位データを用いた。

3. 結果

産着卵は、3月下旬から7月上旬まで確認された(図1~4)。

産卵期間を通じた各調査地点の総産着卵数は、小野が約23万粒、延勝寺が約71万粒、西の湖が約86万粒、伊庭内湖が約55万粒であった。

5月20日以降水位が急激に低下し6月11日まで低下し続けた。小野を除く全ての地点で、この時期に産卵のピークが確認され、総産着卵数に占めるこの期間で確認された産着卵数は延勝寺と西の湖で77%、伊庭内湖で69%であった。

そのため、各調査地点とも大半の産着卵が死亡卵または不明卵と評価され、総産着卵数の内、生存卵と評価された卵は延勝寺と西の湖で8%、伊庭内湖で15%となった。

水面付近の固定物に産卵を行うホンモロコシの特性上、産着卵は水位の変動による干出の影響を受けやすいため、産卵時期の大きな水位の低下がホンモロコの再生産を抑制している可能性が高い。

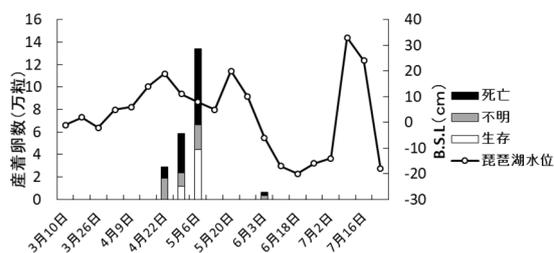


図1 小野における産着卵数の推移

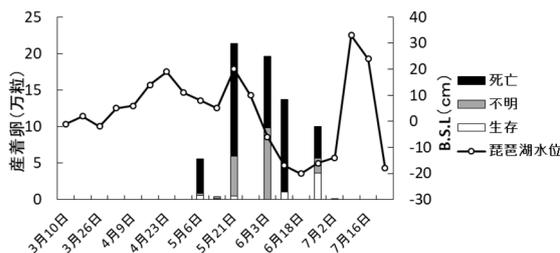


図2 延勝寺における産着卵数の推移

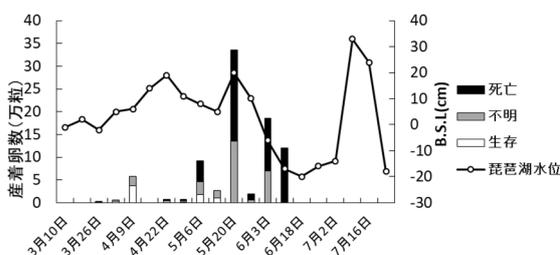


図3 西の湖における産着卵数の推移

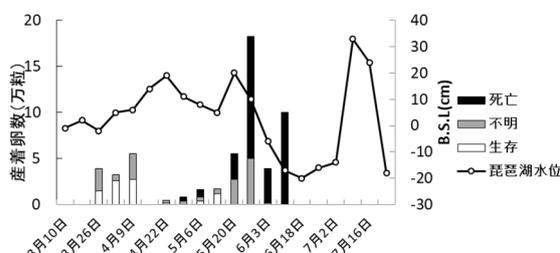


図4 伊庭内湖における産着卵数の推移